

動物倫理の過去と現在

オーガナイザー 浅野幸治(豊田工業大学)
提題者 竹下昌志(北海道大学)
坂本美理(東京大学)
中村健(大阪体育大学)
質問者 池田喬(明治大学)

動物倫理学は現在進行形で発展している。例えば、フェミニズムとの関連や障害者福祉との関連、宗教との関連や具体的法制化、動物愛護法の実効化や食文化などが動物倫理学者の新しい関心になっている。そうしたさまざまな問題関心の中から、今回は、まず2人の提題者が医薬品・化粧品消費の問題と、環境問題を介した野生動物の問題とについて考察する。1人目の提題者は、竹下昌志さんである。竹下さんは、畜産が道徳的に悪いということからどのようにしてその生産物の消費が道徳的に悪いということが言えるのか、という問題を取り上げる。この問題は、動物実験の場合にも起こる。竹下さんは、特に動物実験の場合に、この問題を解決できるかどうかを検討する予定である。2人目の提題者は、坂本美理さんである。坂本さんは、従来の動物倫理では考察されてこなかった問題、畜産が野生動物に与える影響を取り上げる。従来、動物倫理と環境倫理は別立てであり、ときに衝突するという点が強調されてきた。しかし、畜産と野生動物の関係を考えたとき、動物倫理と環境倫理は協働できるかもしれない。坂本さんはこの可能性を考える予定である。と同時に、故きを訪ねて過去を振り返ることも、現在を正しく認識するために必要だろう。そう考えて、今回のワークショップでは、古代ギリシアにおける動物倫理を現代的な関心と突き合わせてみることにする。3人目の提題者は、中村健さんである。中村さんは、主にアリストテレスとストア派を取り上げて、理性と知覚の問題と動物倫理的問題との関連について提題する。具体的な倫理問題から少し離れて、哲学的問題がどのように倫理的問題に繋がるのか繋がるのか、を論じる予定である。また特定質問者としては、池田喬さんに登壇していただく。

第1提題 「動物実験、生産-消費ギャップ、功利主義」竹下昌志
ピーター・シンガー『動物の解放』で扱われている大きなトピックは、動物実験と畜産の2つであり、どちらについても、功利主義的な議論からそのほとんどが不正であると主張している。たしかに、動物実験や畜産の実施は、功利主義的にもそれ以外の立場からでも、その実施が道徳的に不正であると主張しうる。しかし近年、畜産とその生産物の消費について、そうした生産の悪さから消費の悪さに推論するにはギャップがあるとすると、生産-消費ギャップが議論されている。本提題では、畜産における生産-消費ギャップが動物実験においても生じることを、特に功利主義や帰結主義の観点から議論する。

本提題の前半では、畜産における生産-消費ギャップについて、既存研究を概観し、どのような問題が生じているのかを整理する。まず、帰結主義的なアプローチにとって、個人の単一の消費行動が生産に影響を与えないために生産-消費ギャップが生じることを確認する。次に、この問題に対して既存研究で提示されている期待値に訴える解決策を検討する。本提題の後半では、この生産-消費ギャップが動物実験とその成果物の消費においても生じることを議論する。本提題では、日常的な消費実践と関わっている医薬品と化粧品に焦点を当て、生産-消費ギャップが

どの程度生じているかを検討する。そして、功利主義的アプローチでこの問題に対処できるかどうかを検討する。

第2提題 「動物倫理と環境倫理の接点」坂本美理

フレイザーによると、18世紀から20世紀まで、動物倫理の主な関心事は動物搾取の残虐さやその制度化についてであったが、21世紀においては、人口増加に伴って地球に及ぼされた影響一すなわち環境問題によって引き起こされた動物への予期せぬ危害が第三の問題として加わったという。これまで、環境倫理と肉食や畜産についての動物倫理がどのような関係にあり、どの程度重なり合っているのかについては大別して二つの立場が示されてきた。それらは、環境倫理と動物倫理を一つの通底する理論で語る立場と、それぞれを別の理論で語る立場である。たとえば、サゴフやサンドラーは、環境保護に基づく肉食反対と、動物福祉に基づく「狭い」肉食反対とは、同じ結論でも論証が異なることを指摘している。環境保護に基づく肉食反対においては、環境倫理も動物倫理も、人間と動物の価値や生態系と生物多様性の価値というひとつの理論で語られている一方で、動物福祉に基づく「狭い」肉食反対においては、畜産における動物の道徳的配慮可能性が問題となっているため、環境問題については何も言及していないからだ。しかし、上述のように、動物倫理を考える上で畜産における動物のみを考慮し、環境問題の影響を受ける野生動物は考慮しないということはもはや考えられない時代が訪れている。

このような理由から、本提題では動物倫理における野生動物への配慮に着目する。畜産動物などの人間が直接関わる動物とそうではない野生動物の地位に関しての議論を概観しつつ、動物倫理と環境倫理の協働がそれぞれの理論や運動においてどのような効果をもたらすかについて検討する。

第3提題 「古代哲学における動物倫理」中村健

イギリスの古代哲学研究者リチャード・ソラブジは著書 *Animal Minds and Human Morals* (1993) において、古代ギリシアで生じた、ある哲学的・倫理的「危機」について論じている。それは、アリストテレスは動物に対して理性と信念を否定したが、もしこれらの能力が否定されるのならば、その代わりに、動物がこの世界で動き回ることができるようになるために、彼らの知覚内容がそれらを補う形で拡張されねばならない、というものである。つまり、一方において、アリストテレスは(よく知られているように)動物が理性を持つことを否定した(またそれに伴って信念を持つことも否定した)のだが、他方で彼は、動物たちが明らかに何らかの認知能力を発揮して世界で活動している事実も無視することはできなかったのである。この危機に直面したアリストテレスは、「知覚(アイステーシス)」、「表象(パンタシア)」、「・・・」など、認知能力に関わる概念を改訂する必要に迫られた。また、アリストテレス自身は上記の危機を引き起こすにあたっては、それほど動物をめぐる倫理的問題(われわれは動物をどのように扱うべきか)に関心を払っていなかったが、アリストテレスの議論を引き継いだストア派は、動物に対して理性を否定すること、動物をいかに扱うべきかという倫理的問題を明確に接続させている。

今回の提題では、以上のような古代ギリシアにおける心の哲学/動物倫理学上の問題を概観し、さらには、現代における同様の議論との比較を試みる。